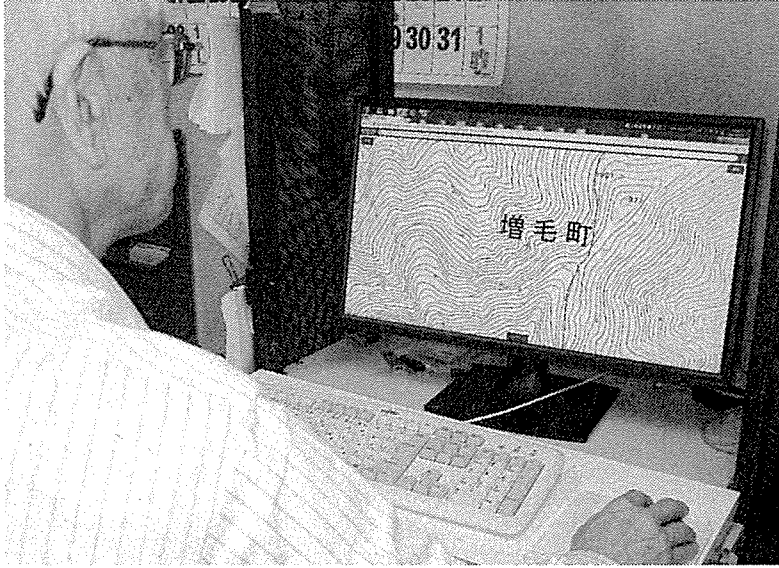


2017年(平成29年)2月21日(火曜日)

復元の
増毛山道

ネット上に掲載



増毛山道が掲載された国土地理院の電子地図を見つめるNPO法人増毛山道の会の小杉事務局長

国土地理院の電子地図に

法人メンバーらデータ測定

国土地理院はこのほど、同院が管理する地理院地図(電子国土地web)に増毛山道の位置情報を掲載した。NPO法人増毛山道の会(伊達東会長)のメンバーらが収集した衛星利用測位システム(GPS)の情報を元にしており、昨年10月に全線復元が完了した山道が電子地図上でもよみがえった。同法人の小杉忠利事務局長は「10年かけて復元した成果が公的な電子地図上に掲載されたことは、私たちの活動にとって一つの記念碑であり、大変うれい」と話している。

(長谷見直也)

増毛山道は江戸時代末期の安政4年(1857年)に浜益、増毛両場所の請負人だった伊達林右衛門が私費を投じ、交易路や北方警備に当たる人員物資の輸送路として、現在の増毛町別荘―石狩市浜益区幌間を開削。明治期には貴重な陸路として活用された。戦後は使用されずササに覆われていたが、地元住民らでつくる同法人と留萌振興局が連携し、22年に別荘―岩尾分岐間、26年には岩尾分岐―雄冬山山頂付近間を復元。昨年は、雄冬山山頂付近から石狩市浜益区幌間までの復元作業が進めら

れ、10月に全線の再生が完了した。

国土地理院北海道地方測量部によると、増毛山道は縮尺5万分の1の紙製地図では大正8年から昭和33年に刊行された地図に記載されていたという。同43年以降、3度の改定が行われてきたが、地図上に増毛山道は記載されていなかった。

国土地理院では、地理院地図への掲載に当たり緯度と経度、高度の3次元データを測定するためGPS機器2台を同法人に貸与。同

法人は昨年、メンバーや体験トレッキングの参加者のほか、宿泊研修で山道を歩いた増毛中学校の1年生らのリュックサックなどに機器を装着してデータを収集、ルートを確認した。

小杉事務局長は「増毛山道が再びササに埋もれることがあっても、地理院地図のデータがあれば正確に再復元することが可能になった。地図の情報を今後の山道整備の取り組みなどに生かしていきたい」と話している。